

現実世界の異変。それは幻想郷と現実世界、その周囲に、かつて解決した筈の異変によって構築されたパプリルワールド、『異変世界』が現れたことだ。

非常に似通った性質を持つそれらは、お互いを同じ物と錯覚し、一つになろうとしているため崩壊の危機に瀕している。博麗霊夢は世界同士の衝突を防ぐ境界を張るので手一杯。しかしこのままでは確実に世界が滅んでしまう。

そして、霊夢はある手段に打って出る。それは、自分のドッペルゲンガー。現実世界に暮らす、白嶺レイムに、自分の代わりに異変世界を回らせること。そして、各世界にある力の核を手に入れさせることだった。

そのため霊夢は知識と力を彼女に授け、紫が生み出した【スペルドライバー】と、自身のカードを渡す。

世界の崩壊を、食い止めるために。

【東方大戦】

破壊されていく。

アキユウは荒廃した大地の中、人が・妖精が・妖怪が戦う姿を見た。そして、彼女たちが皆が、薄紅色の光に撃ち抜かれ次々と倒されていくのを。

倒されて倒されて、誰もが地に伏せていく。

光の先を見れば、一人の少女が光に包まれながら立っていた。ベルトにブックケースを装着し、巫女のような服装をした少女だ。

アキユウからは、その少女の顔は見えない。けれど、無意識の内に、その名を呼んでいた。

「——レイム」

【OP 入るんだってー】

「日枝さん、起きなさい！」その声と共に、アキユウは夢から覚める。周囲を見渡すと、そこは自分が通う女学院の教室だった。どうやら、自分は眠っていたらしい。

最近よく見る夢だ。そう思いながら、教師に謝り席に座り直す。そして、視線をある少女に移した。

白嶺レイム。同級生で入学以来の友人。ミッション系の女子校に通いながら、神様を全く信じていない。ミサにも出なければ校則も守らない。周囲の生徒からは変人扱いされている少女だ。

なぜあの夢の中で、自分は彼女の名を呼んだのだろうか。その事を疑問に思っているとき、チャイムが鳴り授業が終了する。

「行くわよ、アキユウ」

放課後のことだ。いつもの通りやって来たレイムと、アキユウは光琳堂へ向かう。そこは店主のリンノスケが、趣味で集めた骨董品を売買している店だ。だが、喫茶店も兼ねているため、レイム達はよく立ち寄っている。

やって来たレイム達を出迎えると、リンノスケは早速紅茶の用意を始める。「私は緑茶よ、」と図々しく言うレイムに呆れていると、アキユウはある物を見つける。

それは、夢の中で見た少女が身につけていたベルトだ。

リンノスケに問うと、いつの間にかそこに置かれていたらしい。特に用途も分からないので、持って帰ってもいいと言っ

これを見ていれば、何か分かるかもしれない。そう感じたアキユウは、ベルトを持ち帰ることにした。

「何に使うの、それ？」とのそき込むレイムだが、「レイムはいいですよ。こんな物必要ないんだから」と慌てて鞆に突っ込む。

光琳堂を後にし、アキユウと別れるレイム。だが、そこで妙な違和感を感じて振り返った。

何も無い、夕暮れの車道。気のせいかと首を傾げるが、そこで違和感の正体に気づいた。完全に散っていた桜が、再び満開になっていたのだ。しかも桜だけではなく、周囲の花々が、季節を問わず咲き誇っている。

「どうなってるの……？」疑問を口にした瞬間だった。突如地面が大きく揺れたと思うと、遠くに見えるビルが崩れていく。それだけではない。あちこちから間欠泉が吹き上がり、空を紅い霧が包む。更にまだ夕方にもなっていないのに、「月が昇る真夜中へと、空が変じてしまった。」

突如起こった異変に、レイムは状況を見るため高台へ向かう。そこから見た眺めは、最悪だった。街は崩壊し、見たこともない化物が、人間を襲っている。

「何よこれ……っ。これじゃあ、まるで——」

「——世界の、終わりのようっ」

声が出た方を振り返る。そこでレイムが見た人物は、巫女装束を身にまとった、自分と瓜二つの少女だった。

少女は驚愕するレイムを無視し、高台から街を眺めると、「あらら。思ったより深刻ねー」と呟く。

「あんた……！」「レイムが声を出すと、少女はレイムに向き合った。そして一枚のカードを取り出すと、告げる。

「この世界は、あと少しで崩壊する。異変によって構築された

『異変世界』と、一つになることだね。だから、早く解決しないといけない」

「あんた、そんなこと出来るのー?」そう問いかけるレイムに、少女は首を振って「やるのはあんたよ」と言った。

「私は世界の崩壊を限界まで食い止める。だから、あんたは私の代わりに九つの異変世界を回って、全ての力を集めなさい。知識と力は、貸してあげる。上手く使いなさいな」

少女の顔が写されたカード。それを手渡されるレイム。

「ベルトとブックケースはどうしたの?」紫が接合点とか言っていて、香霖堂に置いてきたらしいけど」

手元にそんなものは無い。だが、それらしい物をアキユウが持って帰ったことをレイムは思い出した。

状況を打開するには、ベルトが必要だ。それを理解したレイムは、全速力で走り出す。

「ベルトを手にしたら、香霖堂に向かいなさい!」そこが異変世界の入り口になるわ!」

その言葉を背に受けながら。

妖怪や怨霊に襲われながら、アキユウは他の人々と共に逃げ回る。だが、ただの人間が逃げ切れる筈もなく、孤立してしまうとあつと言う間に追い込まれてしまった。万が一と思いいベルトを装着しようとするも、全く反応しない。

絶体絶命、そう思った時だ。向かってくる妖怪たちの背後から、アキユウを呼ぶ声があった。レイムだ。

「ベルトを寄越しなさい、アキユウ!」世界を救ってあげるわ……多分、ね」

一瞬躊躇つアキユウだが、このままでは殺されてしまう。手にしたベルトをレイムに投げ渡した。

レイムが腰にベルトを添えると、装着される。続けて、少女から渡されたカードを差し込んだ。

「――変身!」

そしてレイムは、楽園の巫女……博麗霊夢へと変わる。

レイムの姿は、制服から改造した巫女服へ。夢で見た少女の姿と同じことに、アキユウは息をのんだ。

背後で変身したレイムの姿に、妖怪達は素早く逃走を開始する。だが、「チョココマカ逃げてんじやないわよ!」と腰に留めた『サイゼンブッカー』から【文】のカードを引き抜くと、変身。ベルトを残し、射名丸文へと姿を変えた。そして玉串を構えるので、超高速で妖怪達を払い倒す。

消滅する妖怪たちを見ながら、「知識と力。こういふことが……」と元に戻りながら呟くレイム。

アキユウを連れ、少女の指示通り光琳堂へ向かう。

だが道中、今度は怨霊の群れが現れた。アキユウに下がるように告げると、今度は【妖夢】のカードで魂魄妖夢へ。白樺刺を呼び出し次々と切り裂くと、続けて【空】のカードで霊鳥路空へ変身。八咫鳥の砲撃で前方の敵をまとめて吹き飛ばした。元に戻ってカードを見ると、霊夢以外のカードは使用不能になっている。「お試し一回のインスタン卜ってところね」と言いながらブッカーに戻して、目的地へ。

光琳堂の中は、外の異変など無縁、と主張するかのようだった。かだった。つい連れてきてしまったアキユウ。レイムは状況を説明し、戻るように言うが、彼女は自分も旅に同行すると告げた。

「レイムさん一人だと、逆に異変が酷くなりそうですから」とはアキユウの言だ。

しかし、光琳堂へ来たものの、どうすれば異変世界に行けるかは分からない。レイムとアキユウが首を傾げていると、外の状況を全く知らないリンノスケが、「またお茶しに戻ってきたのかい?」と柱にもたれ掛かる。

すると、それが合図だったかのようになり、スクリーンが落ちてきた。そこに描かれているのは、巨大な柱。舞う鉄の輪。そして、奇跡の風。

「風神録の……異変世界か……」

それを見、レイムは無意識にそう呟いていた。

そしてレイム達は、第一の異変世界へ。世界を破壊し、世界を救う物語が始まったのであった。